



貝畫浦乃錦卷下

目錄

百介圖

追補介圖

前歌仙介歌并圖

後歌仙介歌并圖

貝蓋圖式并貝あいせや指南

相貝經

貝畫浦乃錦卷下

百介圖 ひやくかいのづ

鶺鴒介 あざむし



俯

仰

みる介 みるかい



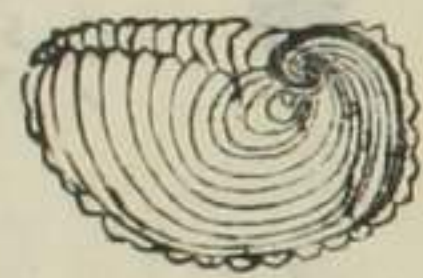
めくろむや介 めくろむやかい



赤牛花介 あかぎし



菱介 あしひら



後極介 あきぎし



たご介 たごかい



月日介 つきひ



釣瓶介 つるびん



肥子介 あかぎし



蓍の介 あしひら



蟹介 かに



びろ介 びろかい



山老介 やまらう



俯 仰

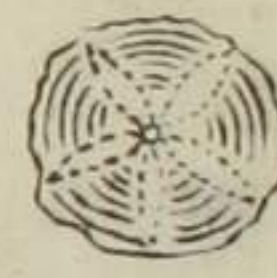
小楪介 こぢ



香粉介



横梗介



紫介



雌卷介



甲介



燕介



首介



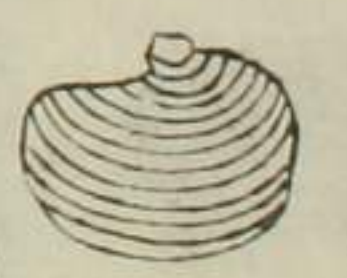
松虫介



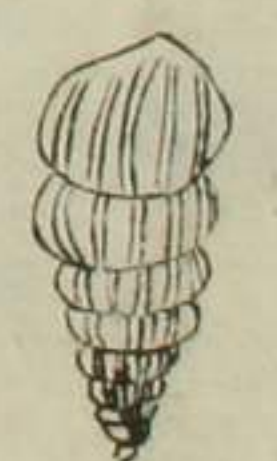
牛角介



白玉核介



線かけ介



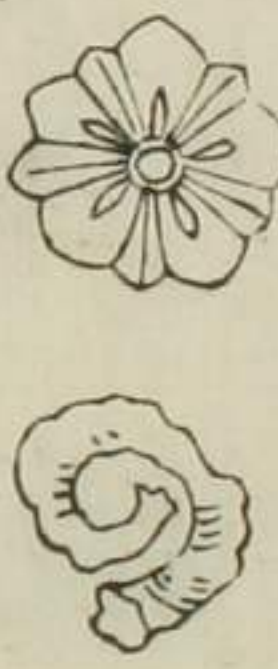
酸介



ミセソウ介



曲介



舟介



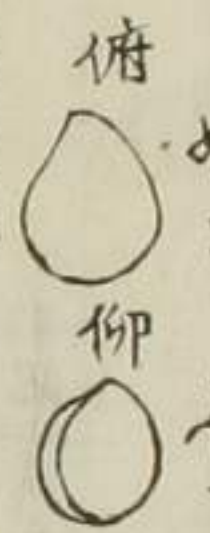
蜻蛉介



草芥



俯仰



貝子



魚のぞり介



志乃介



仰



車介



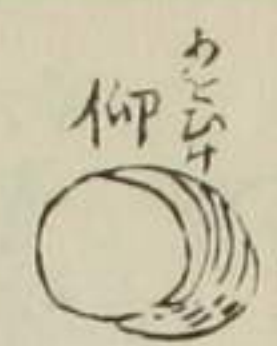
刀介



石芥



卷介



瓶介



岡名一種



鳴戸から介



善介



岡名一種



さ波介



千歳介



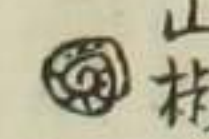
まんり介



がら介



山椒介



長介



かろ介



釜の蓋介



口切介



し介



標介



妻介



夏桃介



かや介



女帝花介



海老介



偏笠介



岩ハ



ヤリク介



若若介



けあふ方切開き
より若介

層形介



細介



かこ介



赤箱介



箱介



澄介



馬帽子介



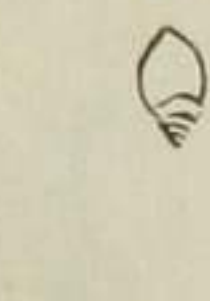
多秋の介



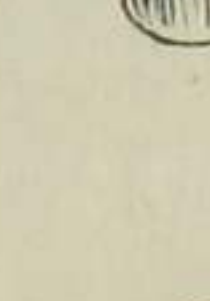
苔介



白葉介



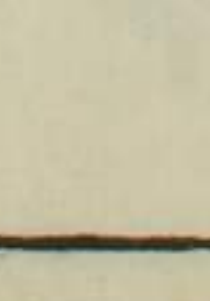
若若介



要介



圓吉介



紅嘴介



美楳介



八重梅介



松介



若若介



蟬の相介



扇産介



去々介



松風介



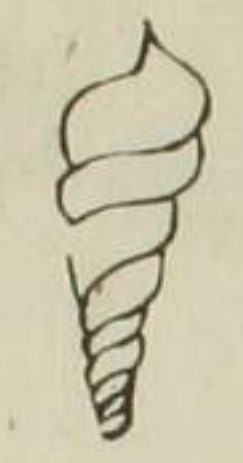
若若介



若若介



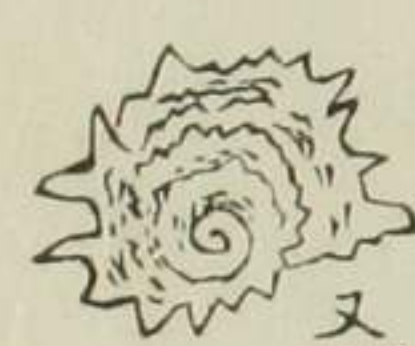
右の物介



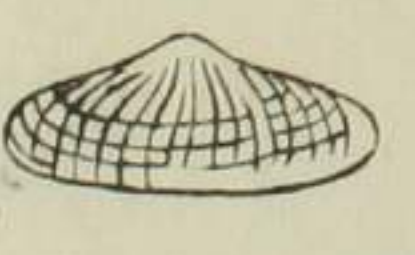
推れ介



花道介



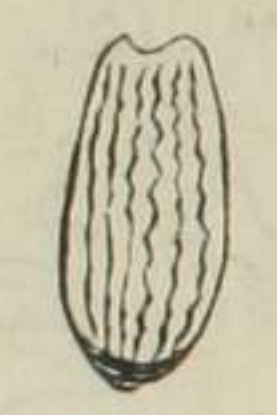
玉づ介



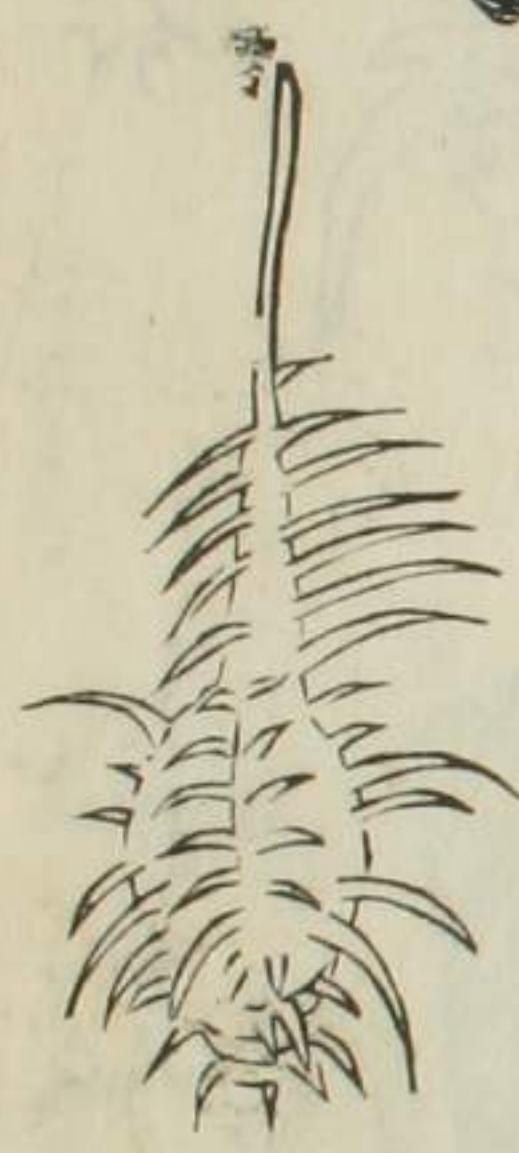
荷苞介



松介



悪鬼介



俯



仰



腰高かんがり介



鬼さかか介



たつた介



百貝番より大者貝も



紅貝も
色介
足様介の
別種

追補介圖



袖介
袖中の
物也

とれ貝中
百貝番の蟹



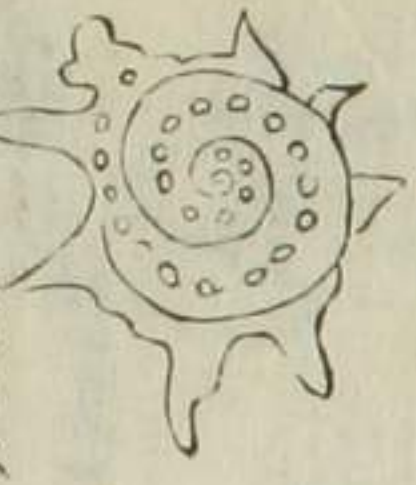
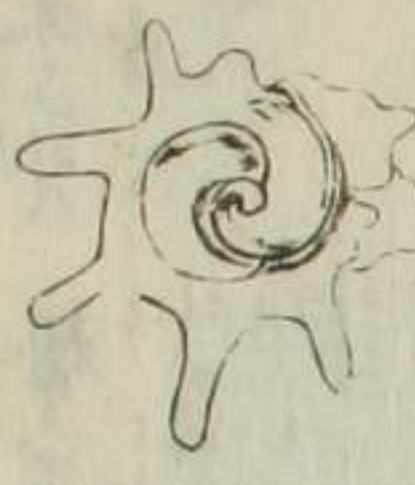
眼貝
目も



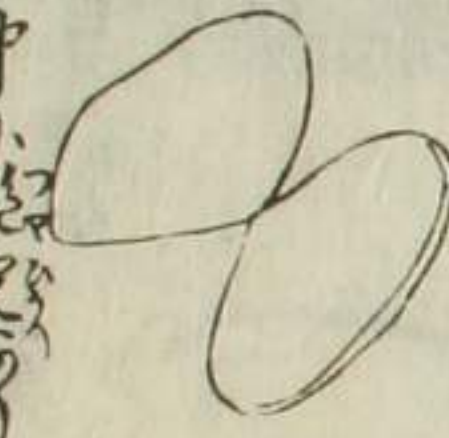
食貝
指介も



片部分
角片



持介



娘介



櫃介

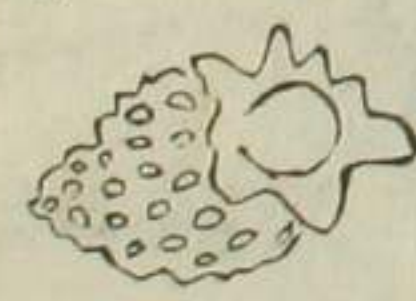


筆介
りも

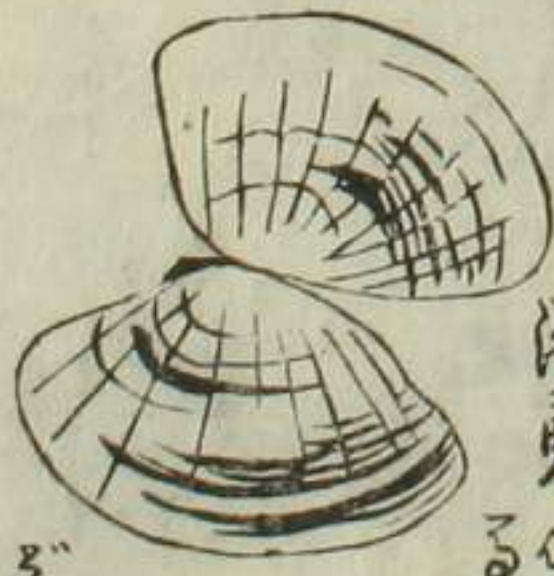


海燕
きふく
まかて

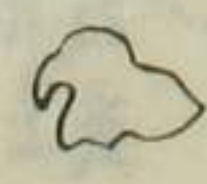
同



圓貝



淺貝
る貝も

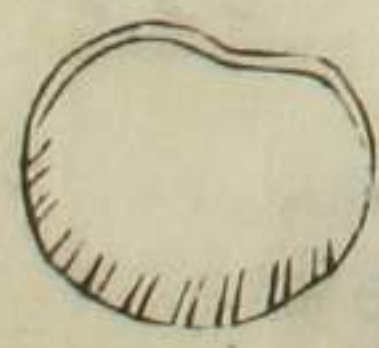


雀介の
又か
も

泥貝も



馬貝



貝類圖

五

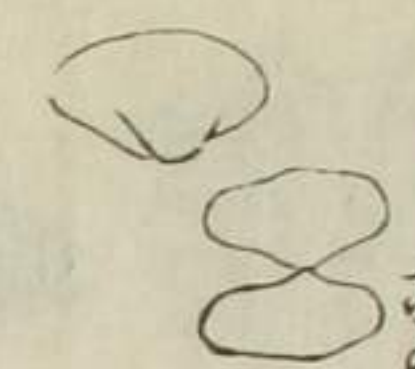
麻子貝



蟹貝



三津貝



石の石りり

瓦貝



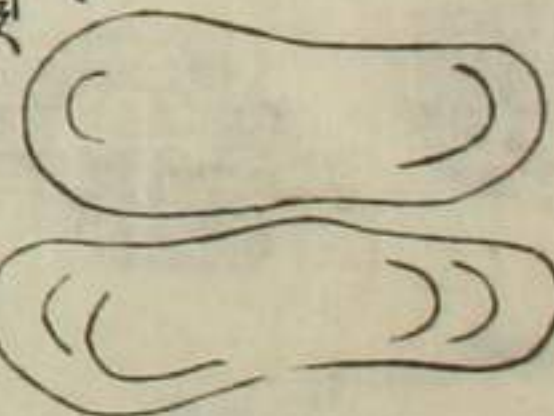
海苔貝



女良須貝



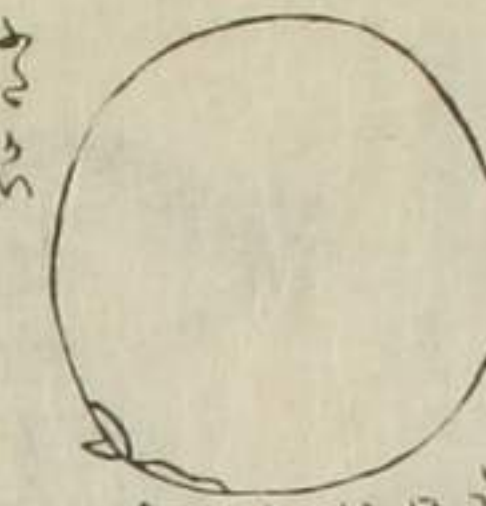
楳折貝



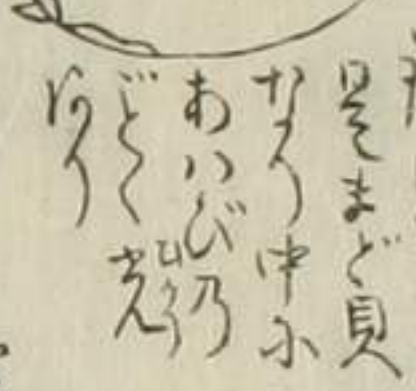
阿母貝



板貝



淺貝



鶉貝



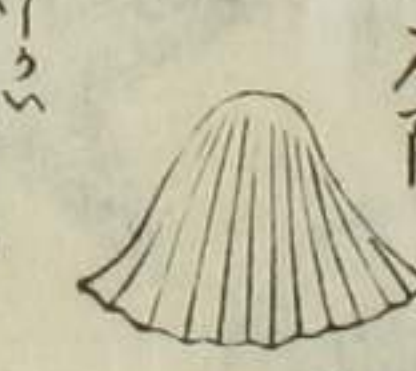
又尾上貝



北香岩貝



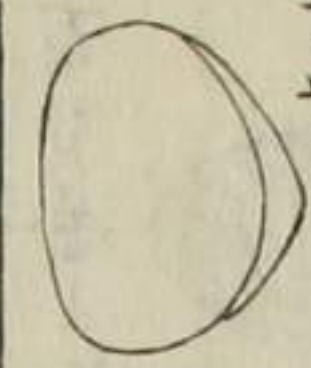
石陰貝



數貝



蓋貝



懷貝



笠貝



臥貝



戎貝



梭尾螺



玄龍集

磯貝



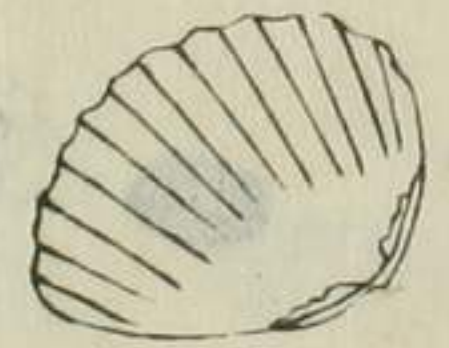
磯螺



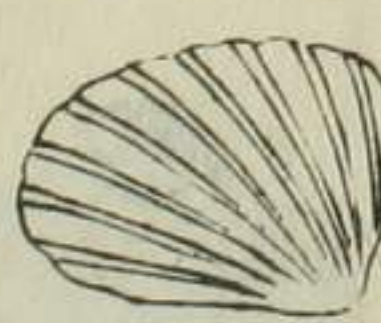
玄頂貝



玉朮貝



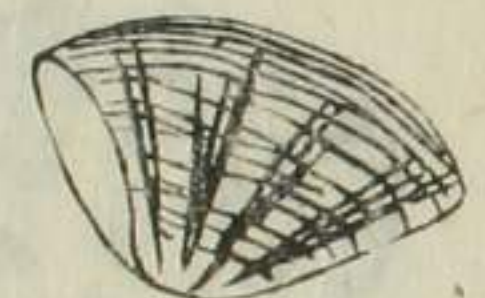
鳥貝



女貝



破太志貝



面貝



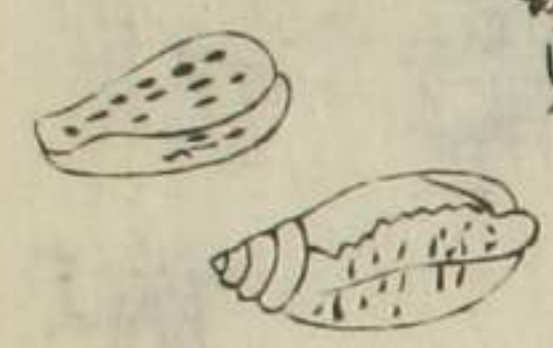
久保貝



紅標



雜貝



縁貝

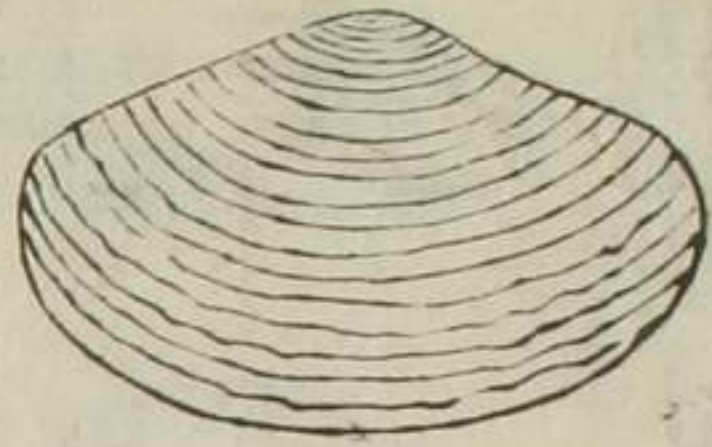


志竹貝

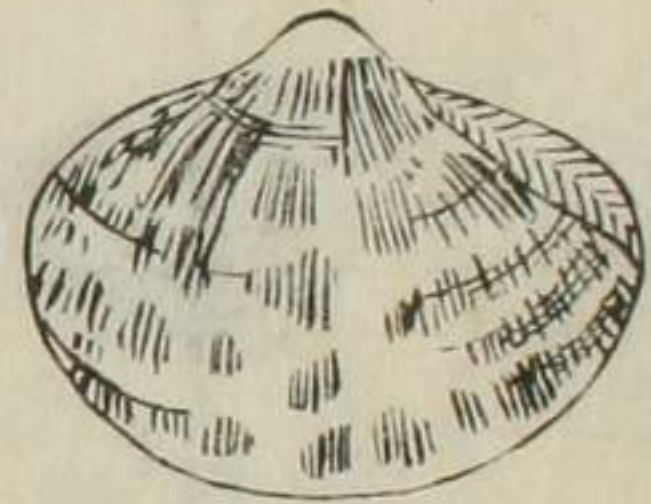


前歌仙貝之圖

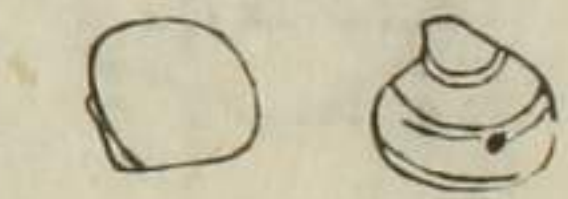
笠貝



志貝



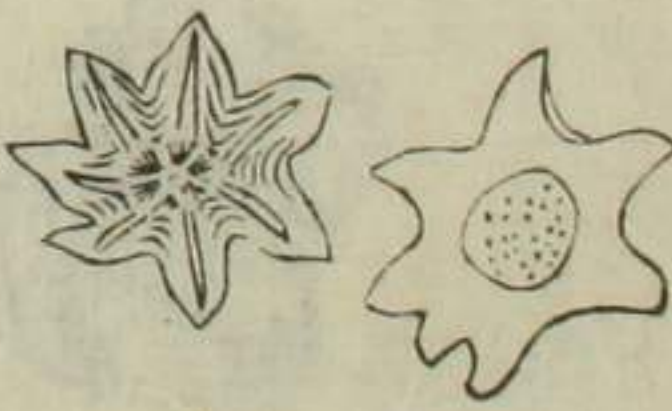
梅花貝



櫻貝



片貝



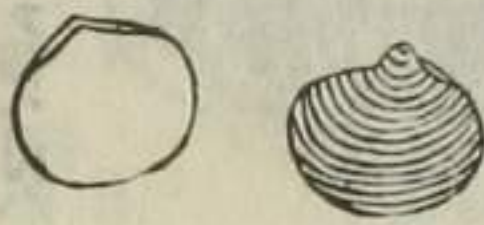
石史明介



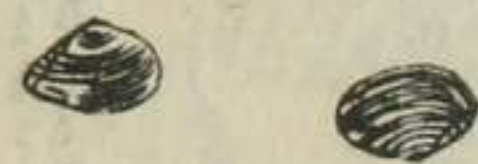
紫貝



白貝



蛤貝



帆介



海貝



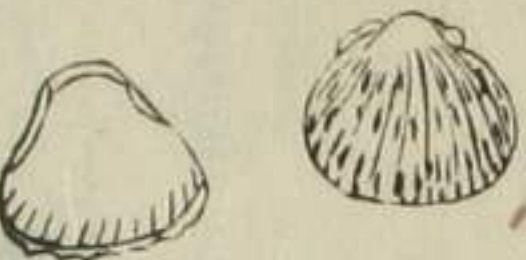
馬刀介



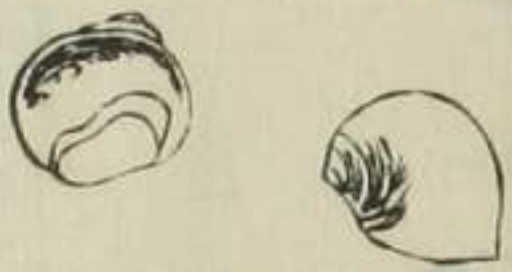
花貝



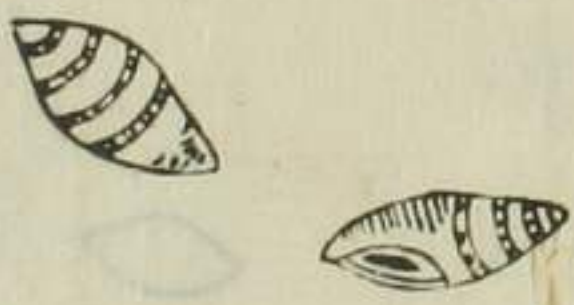
曜麦介



空谷貝



袖貝



船介



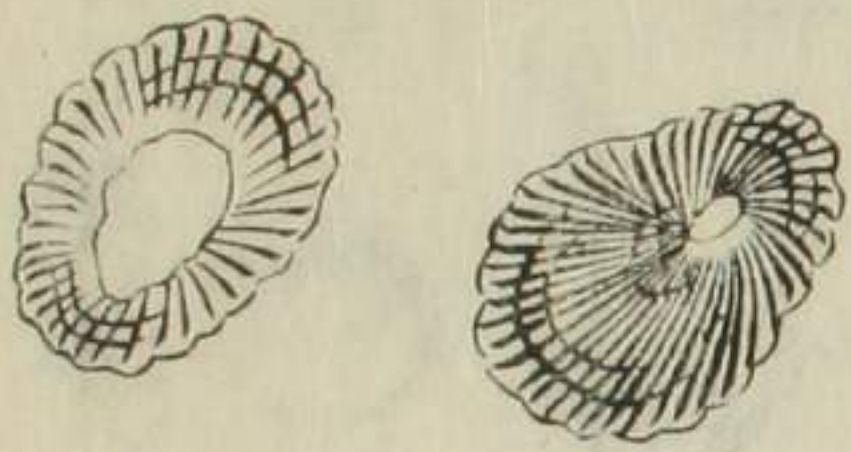
壺介



浦打介



磯貝



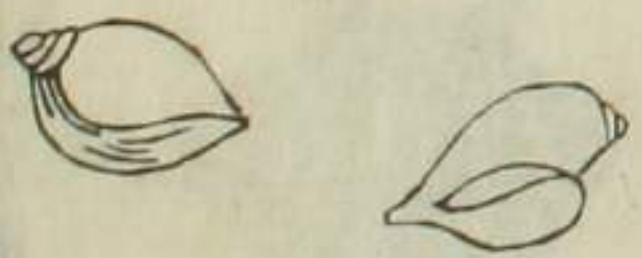
佐多軟貝



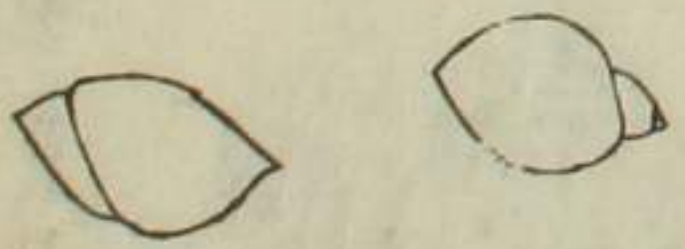
千種介



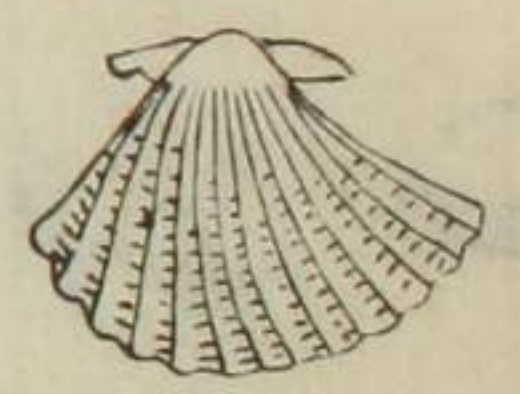
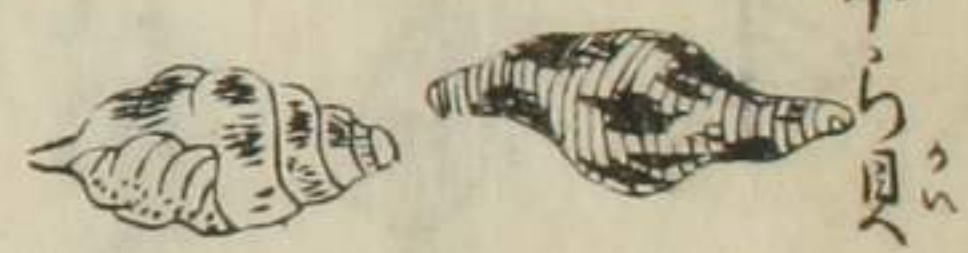
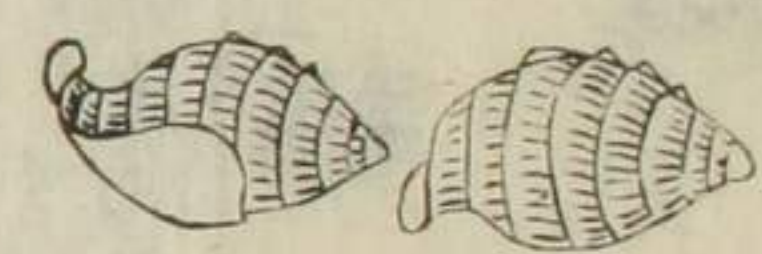
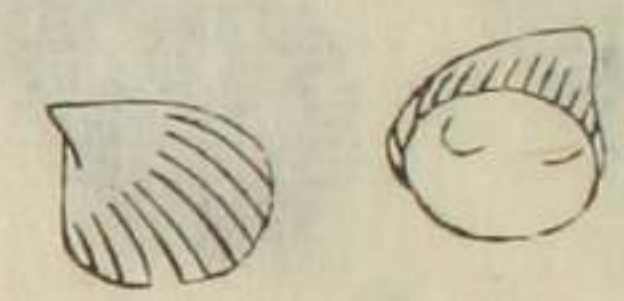
物何ら貝



津貝



鳥貝 雀介 却介 から貝 夕や貝 色貝



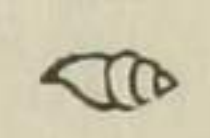
破貝



蔴介



小貝



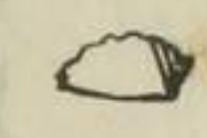
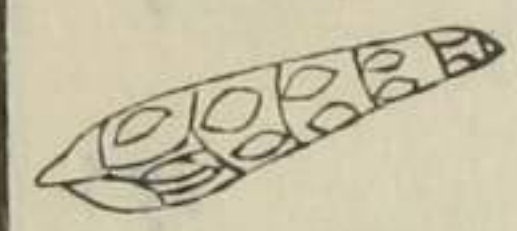
美穂拾



浪同拍貝



貽介



前次仙三十六首和歌

笠屋介 左一

山家集 波かろ吹上の淡れまされ貝風と我かるほいそだ拾り世

忘介 右一

後拾遺 松山のまの浦の汐ささよせば花りひて思へ忘ととと拾目

梅花介 左二

風み波や朽りきんみちくの難が情のむ免乃を船りい

橋介 右二

夫木西の 春そとていかほののこれあま人にまげひろくんとさそ貝を

片介 左三

い勢暗や二見れうのか〜貝あいで月と待ぞはきばよ

石守明介 右三

守明のあまれ船おろふかひく〜あはびの貝のかこねりして

若介 左四

若介はれ貝する浦乃後沼き波の〜はやふ〜えさる

白介 右四

白介〜とあらうの浪れ白貝の交入〜あきるお〜た〜ん〜

輪介 左五

今若志系二見の浦のとほろ〜を貝あい歩とぞおり〜お〜う〜

祝介 右五

志〜とる望田の浦のあり人よよまき〜い〜か〜い〜ぞある〜

海介 左六

海の浪ま〜お〜貝〜お〜ろ〜う〜か〜ひ〜こ〜が〜き〜り〜お〜れ〜よ〜お〜同〜人〜も〜ね〜し〜

馬刀介 右六

後撰源英明 行勢は海乃阿まの浦〜と〜さ〜る〜ま〜ど〜し〜ら〜む〜て〜波の〜せ〜ら〜い〜も〜

花介 左七

花介〜ら〜ら〜ま〜ま〜波の〜お〜ろ〜ね〜む〜ら〜む〜く〜よ〜ま〜る〜お〜け〜れ〜花〜貝〜

聖妻介 右七

天木西折 志が〜し〜む〜が〜で〜こ〜貝〜よ〜志〜く〜ま〜い〜や〜ま〜ま〜か〜ら〜も〜何〜し〜と〜お〜思〜ひ〜

空替介 左八

松河百首師親
あつるあつる花れ浦のふせ貝あいでやわらるるやあつる

袖介 右八

波河夫木よ衣ころしのしれ神貝そでと志こころひり風かぜのあみとく

船介 左九

こく人ひとと満みぎさりあまと終おひ舟貝ふねのあぶらるる風かぜやはらむなる人

燈介 右九

浪なみ月つきより一ひと握ともつた城しろ住すま者とわやくいなるあふがつかう群

浦打介 左十

田あ路な橋はしさいぐりのきと葉はとかきとけて浦打貝うらうらひと拾ひろひつ終おひる帆

磯介 右十

夫木あ丸まの玉たまよ浦うらまきる磯貝いそのかる急いそのし終おひ年としいなるは

佐多部 左十一

こく人ひとすむ浪なみうれ岩いつがきと終おひ出でくい所ところも海うみ士の浦うらになるが

子種介 右十一

夫木あが代しろれきとめしとる長濱ながはまふふさこの貝いれ殺ころもつき掛かじ

物あつ介 左十二

こちとまふれははき船ふねあつ人ひとあつ思おもはくところあつ

津介 右十二

鴨長明
そあみつ終おひ人ひとにかなされかす終おひ貝いらねよつあてがきとくつ

鳥介 左十三

山家集四行
流よはふ志らうれ溪のかさ貝拾ひやうくもかりかゆらう

雀介 右十三

はくすお竹のよまうれ雀貝うれまき世あもわひ小まうれ

都介 左十四

夫木
とことと進ばふいしれたこの若小おる如貝まづ拾ひおれ

被尾螺 右十四

山ゆーのうー小はさるるほの貝ふくおまこれ秋の夜乃月

文輪介 左十五

信意
あやしくまうらばしよらや貝か物く海士のあひおれまわ

いんや介の文輪のまをうれを誤り
海士のまをうれ文輪のまをうれ

色介 右十五

夫木 菩提院園白
ゆみてハ磯乃まがれおく色貝のうたま志所乃意わらるる

破介 右十六

漆
和おの浦小ゆさきうけれれ貝も拾へおれま又あうらる

燕介 右十六

与謝れ海乃ゆ干れかのま御地をうけまきと貝のうらうら

小介 左十七

山家集四行
なふは沼志ぬひよひれて出さん志うれのたまこれ小貝拾ひり

美穂坊介 右十七

志回をゆるまうらよれ小貝まらまうらまの溪くハいあやわらうむ

浪間拍介 左十八

浪間拍介がなまがしハをるがどれ目もこれ神小月やどれ終
賄介 右十八

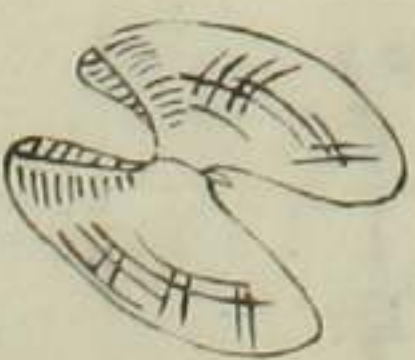
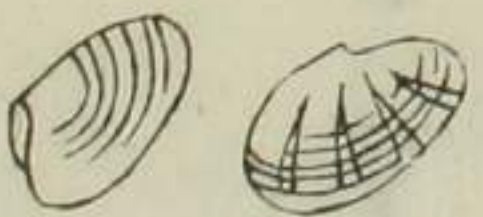
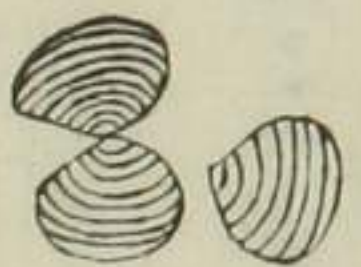
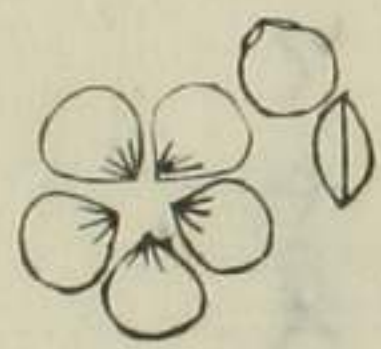
あこやと終い貝のかつとけとおきと瘻のわととえ終るなりと

元禄二巳年林鐘上旬

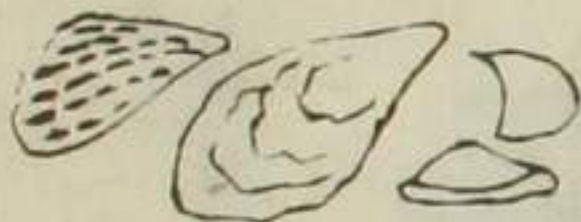
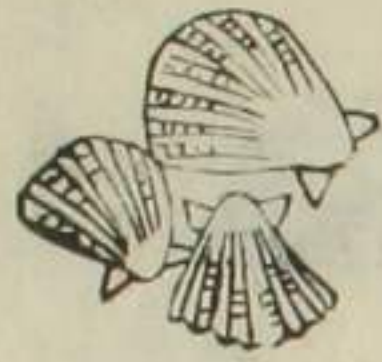
右前歌仙貝歌詠人々撰集せしつと終る終り終と関心を撰
うらげけ撰わききしつと後歌仙の序文小えへつと貝れあ
おふ出しやうめしけ配當も得多し上り評とるがどし

後歌仙介之圖

ととれ貝 くととき貝 樹れ花貝 花貝 楊貝 ぬき貝



飾貝 色貝 ぼり貝 ね貝 うち打貝 さきへ貝



白貝



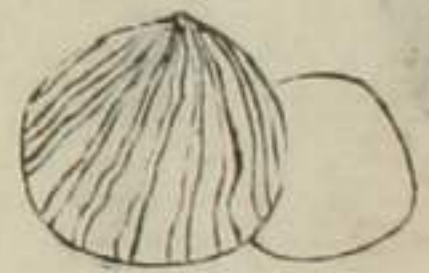
白貝



なごしこ貝



白貝



きやう貝



松貝



ふらふら貝



花貝



や貝



何こや貝



あひび貝



かき貝



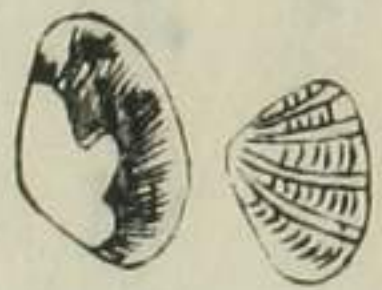
ういせ貝



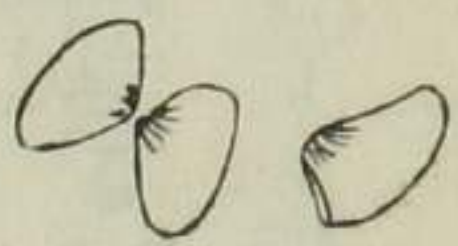
なが貝



あろ貝



糸貝



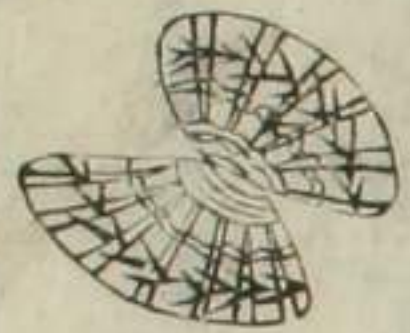
おろ貝



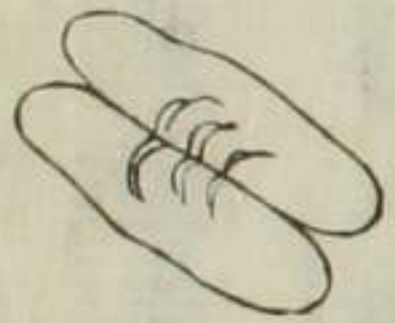
かた貝



サア貝



海貝



えいふ貝



きみ貝



小貝



千粒貝



さざき貝 左一

仙家集西行
浪うら吹上れる海のさざき貝風を我らおろしそ地拾えん

つすね貝 右一

夫木 順徳院
うみのさほ磯に浪波のさざき貝を我ら拾えん

梅れ花貝 右二

夫木 拾後
さき風は浪やおうえみちけく乃まがたが海の梅れ花貝

花貝 右二

夫木
枝ねがうらうら波のおろし梅れ花貝

梅貝 右三

定家建保百首
停勢の海浪れ梅れ花貝のいろの如

浦とが貝 右三

夫木
志平せむらよとよ京貝いろと色の浪とわらわ

錦貝 左四

三余院内製
あたまは小色とつうてよる貝は少きれ浦とみあがる

色貝 右四

名取
いろくの貝あうては拾はめきちくこの浪れおろのまふく

から乃貝 左五

家連
山ゆれは海吹の夕暮ふそこもさうぬきく乃上

都貝 右五

夫木
とそとれは海吹の夕暮ふそこもさうぬきく乃上

うら打貝 左六

田舎さいぐさのさや茶とだりて浦の貝とさういつるぬ

さきへ貝 右六

市にへま心浦のれ岩つがとあ出いそまあれうたなるか

世々貝 左七

ひくさの貝より浦のあつき波れうねぞとええきう

白貝 右七

名寄 いろねくとまららの浪れ白貝のうらあまらまかちあうんぬ

なごうと貝 左八

夫木西行 おしやまじなごうと貝よまくといやはかまもいしとをたよ

浪間か 右八

難波女がなままごういとる程ふ日も善神小月が中が程ふ

さぬと貝 左九

勢をたけ衣れ浦の縁かけうてるまをたけひもなるよ

枕貝 右九

船さしつへた乃浪路の南う貝くひゆるまふあにさう先やハ

あき貝 左十

とあちやうあまをわよのほまなびらひゆる浦のあにさうあやハ

まご地貝 右十

味本大の屋重 はよする岸のそめりの産貝うまうた世もあひりうたや

わ貝 左十六

海原やなふふやうやう何貝乃かひあるはとかなれるかこさ

とほ貝 右十六

江の底よみぞ貝ひあふうなひまがそい建よぶの向人をぬー

とほづ貝 左十七

今昔志願さるれ海のをあづを貝あらせとむあなうりまは

とほみ貝 右十七

志々々たるがこれ浦乃何人よまあういへもかひぞ何のぬよ

小貝 左十八

海師光 海の海さよた清は釣とぬくみやこのはよ小貝むろん

ち ちくち貝 右十八

夫々代の中あくとるあ長流は千種乃貝の教もつきぢぢ

右後秋仙貝秋終よ姓名を祀せさきは櫻老をさうが

前お仙りあさきり序中お先人乃お仙貝の集と

難は梅さ終り此書の始よ記をあお仙乃か

又一集何あといんえり六難の中かゝる貝あてそ

貝さぬ貝海 貝の何川は始り載る前あ

仙の中さな 余若年の岡下河邊長流の選

とほ ちん貝乃集写 今今久しくなうて

終失し〜ゆなり〜按ぶるは是等乃其末を也
群〜きらあやあは貝ゆて貝れ二川其群あは
此書乃中の前あゆと載せ付まはけ二あしかり
ち〜き移は阿〜く移べ〜その〜後あ伝集を
用ゆ〜今秋伝貝の集異同阿〜り成ち
志あんがきああふけ後を加ふは

貝蓋記

此戲ハ高家女児のワぶり〜く傳りれ家行神主の
記阿〜て其始と篇事記お出る黒貝姫與拾貝姫命よんは
全文を考ふるはして貝合の鑑鑑と〜べきあ阿〜は品を名
より牽合附合せるなり次は景行天皇五十二年淡氷門は御幸
れゆを〜得白拾の〜を以〜後と〜はも是も只拾而進
之の〜の〜少〜貝合の起と〜るふあ〜は〜と〜牽合の設け
旧中紀全文を考ふるは此の〜貝合の記とすふ〜と〜迎來せは
其あけり〜を載て後會直方の書よ出ると記す余が傳れ
家行の作と〜りいげきり是なることを志は只貝のりは子あ



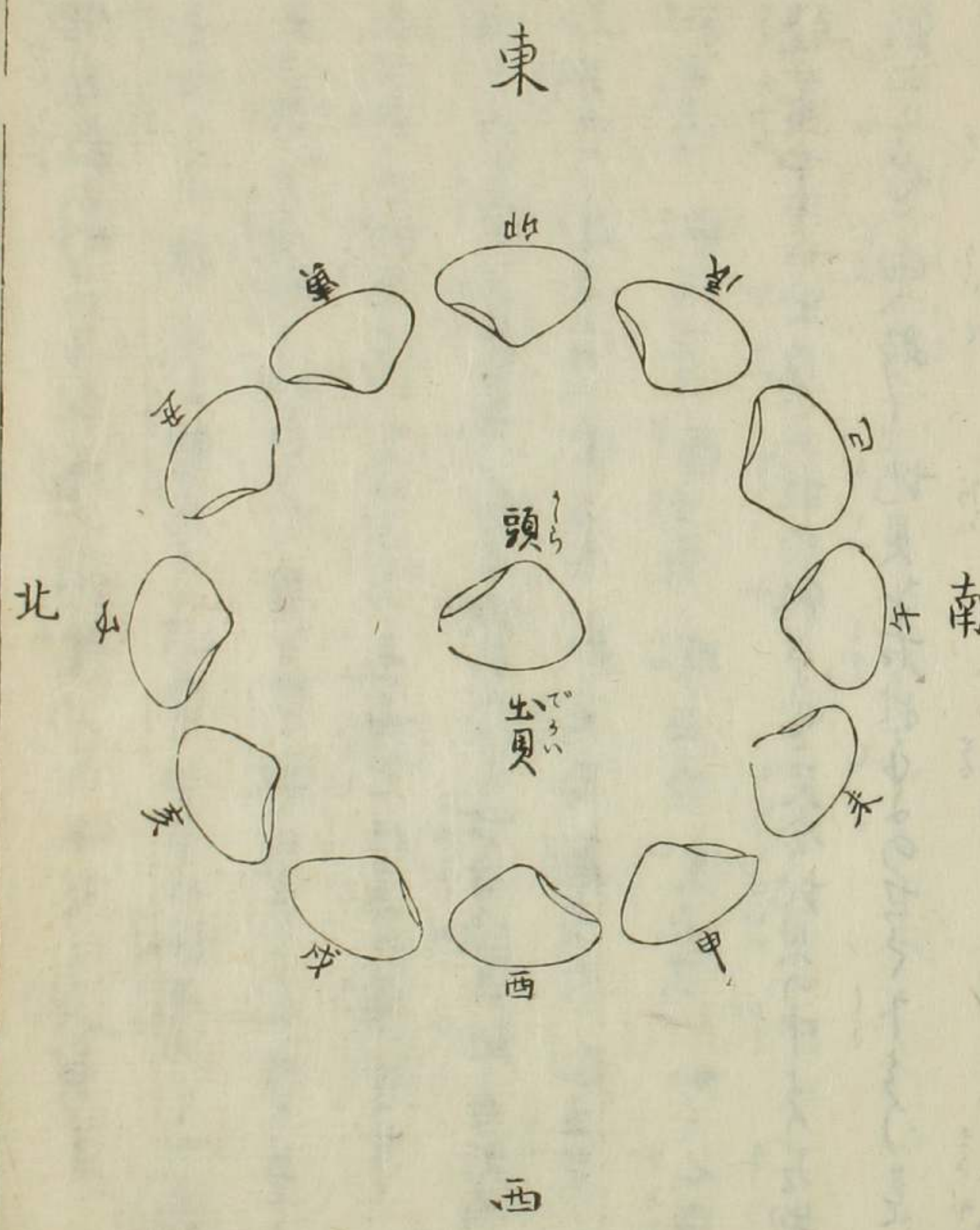
月夜



月夜

何れども他の貝は不食の類を以て婦徳に比し一夜嫁して一生
 他の妻小主人へする貞節の義小主人の心おへをりて
 女の死とあつたり其始つておつたりは愛と其態をあら
 すと記し世に傳ふけりとする所より人々さしなう師を
 ゆる片都の人には甚ふけりまのりしを記するなりとなり
 そのなり委するに面技は変なりていふべし
 先貝の敷は二百六十あり一年の日に敷小象なり正月初午
 の日おひひるむせまび毛纏と二枚交中央小まき書紙一枚
 と交貝桶出貝の方より先一可中央へ出た列の方地
 主人の方へ向るなりまより地貝の桶より地貝を出し

編子十二なり姑岡月ハ十三なり



玉女もく神と云習わうけうやうい何何あくも其時より
 九つ目と云女といひ二つ目と云神の方と云ぬきと云相の
 六つ卯の時より亥の方が女己れ方う國神なりこれより
 卯の支の方を考へて出づべし此のほき秘りなり
 子辰九つ 丑辰八つ 寅辰七つ 卯辰六つ 辰辰五つ 巳辰四つ 午辰九つ
 未辰八つ 申辰七つ 酉辰六つ 戌辰五つ 亥辰四つ かくんぬへし
 依蓋やうい出貝は形の似たるを又合地貝の中より出出貝乃
 頭の方と向へぬ地貝を右れぬものせくとよりとくひ上
 やう又取て片もあう合せ向へむむなりあふまきバ又外取又合

かくいしとわわひうある何いたのよ神子入神ぬぐとく合に
 度したのよあふ出とあふもよとあふいなる貝を家
 あよとく時貝の口を向をのけうやうと二つふれぐとよの平あて
 れせおとたたへぬせうとく貝の中は彩色強あやうかき一何う
 こきと合とといふ事よい何は貝れ形を又知合はるゆりり
 各向は貝と用由建はよ合かじしうとよつき候特の人よあひ
 用由べー貝敷多く合せぬと勝と定む程は倍多
 貝桶は出貝と地貝といふ二つは納玉中へ入やうい中より
 びりく小まき杯けまるく入るとのなり何は圖のいとし
 地は右へ旋り出は右へ旋るべし

貝桶圖
ういねけのづ



婚禮小貝桶ういねけの合あひさばうり結むすむすじつに也合あひ方かたハ貝かいの
 みの長ながき方かたとおへて二つよりふたつより我わがもあふ右みぎの方かた也左ひだりをば
 だだ方かたといふあり古ふるき徳とく礼れい家けの書しよふススるる
 出で貝かい蓋おほてて瓦わバ又また一ひと桶おけより出でるる次つぎ舟ふねふかくのごとくつゞき
 地ぢ貝かい瓦わささ阿あきき一ひと路ぢへかかままななびび貝かいをを出でしてしてななももああれ
 やや小こははくららひひ並ならびびてて瓦わバ一ひと桶おけより貝かいの出で入いつつささははの
 女をんなの役やく目め形かたちり功こう者しゃの人ひとははおおろろかかありあり

大枝流おほえだケけ方かた記き

貝蓋記終

貝桶記終

五



朱仲以貝經授於琴高圖



附錄

相貝經

漢 朱仲 著

黃帝唐堯夏禹三代之貞瑞靈奇之秘寶其有次此者貝盈尺狀如赤電黑雲謂之紫貝素質紅黑謂之朱貝青地綠文謂之綬貝黑文黃蓋謂之霞貝紫愈疾朱明目綬清氣障霞伏蛆蟲雖不能延齡增壽其禦害一也復又下此者鷹喙蟬背以逐溫去水無奇功貝大者如輪文王得大秦貝徑半尋穆王得貝殼懸於觀秦穆公以遺燕鼉可以明目遠察宣玉宣金南海貝如珠磔或白駁其性寒其味耳二水毒浮貝使人寡無以近婦人黑白各半是也濯貝

使人善驚無以親童子黃唇點齒有赤駁是也雖貝使病瘡黑鼻無皮是也瞻貝使胎消勿以示孕婦赤帶通背是也慧貝使人善忘勿以近人赤熾內殼赤絡是也管貝使童子愚女人淫有青唇赤鼻是也碧貝使童子盜背上有縷句唇是也雨則重霧則輕委貝使人志強夜行伏迷鬼狼豹百獸赤中圓是也雨則輕霧則重

緯畧云師曠有禽經浮丘公有鸞經雖相畜亦有牛經馬經狗經下至蟲魚有龜經魚經唯朱仲所傳貝經惟奇是朱仲受經於琴高

石朱仲相貝經五朝小説魏晉藝術家中有之享保乙巳
歲八月下浣於泉谷山中寫之

按本草綱目曰朱仲受之於琴高以遺會稽太守嚴助云云
右著以新乃今謬二考是也中州產物考考子之類
あゝも只弄玩の事多ふそあゝ余が舟紀十車和交
山の産物なりと云々園好介を土居あゝ子依り幼き
ゆりり此好玩の事多ふ今も推せ之條の暇は介謬
を志海と本州綱目及び大和の中州等も外をわりの
徳島今若多一といへば是食用物考乃中記を
け甚ハキも戲弄れあゝも志海一と云々あゝは

既とちうらぶさふ頼ハ是を載せ後浣の人遺漏を羅
まはるる形の後玩好の介小於くハ及ぶはあゝ亦を
増益せん事を希はれ

寛延二歳三月上澣 大枝流芳記

長壽寺之金卷

大枝流芳先生著

雅遊漫錄

全十冊

追付出来

寛延四年辛未正月本出

江戸通本町三丁目

西村源 六

大坂心斎橋頓慶町

澁川清右衛門

同 南新町三丁目

伊和惣兵衛

書林

